

「森林の多面的機能」
解説シリーズ

第34回 物質生産機能 (建築材料としての木材生産)

構造利用研究領域 林 知行

森林の物質生産機能とは

森林には、建築用木材をはじめとして、木炭、キノコ、山菜、ウルシなどの林産物を生産する機能があります。この機能が森林の「物質生産機能」と呼ばれるもので、お金で比較的簡単に評価することが出来ます。この点がこれまで本連載で紹介されてきた様々な公益的機能と大きく異なるところです。

日本人の住生活との関わり

物質生産機能、とくに建築用木材の生産は、薪や炭の生産と並んで日本人にとってなくてはならないものでした。江戸時代の末期まで、日本の建築はほとんどが木造でしたから、森林が木材を生産してくれなければ、日本人の住生活が成り立たなかったのです。

現代では鉄筋コンクリートや鉄骨造りの住宅も建築されますが、新築住宅戸数の約半分は依然として木造です。したがって、日本人が森林の物質生産機能に頼って生活しているという仕組みに変わりはありません。

しかし、日本人が頼っているのは日本の森林だけではなくりました。よく知られたことですが、日本で使われる木材の80%以上が外国産です。つまり、日本人が頼っているのは、主に海外の森林になってしまったのです。

日本の森林だけで需要をまかなえるのか？

とはいっても、現在日本の森林には40億立方メートルを超える木材が蓄積されています。一方、日本の木材の需要は8千7百万立方メートル程度ですから、日本の森林にはおよそ45年分の木材の蓄積があることになります。もちろん、これは森林や木材の質を考えに入れていない話なので、実際にはそれほど長期間の余裕はないかもしれませんが、いずれにしても、日本の森林だけで日本人の住生活を支えることができるはずなのです。

それなのに、なぜ海外の森林に頼ってしまうのでしょうか？それは、日本がコストパフォーマンスの高い外国産の木材を、世界中から自由に輸入することが出来るからです。国産材には、地形が急峻、機械化するのが困難、製材工場が小規模、木材の流通が複雑、主力樹種であるスギの加工が難しいといった大きなハンディがあるので、上のような外国産材との価格競争で後れをとってしまっているのが現状です。

国民的な取り組みを！

しかしだからといって、このまま放置しておけば、それでもなくとも深刻な状態にある日本の森林・林業がますます立ちゆかなくなってしまう。問題の解決のためには行政的にも技術的にも上に述べたようなハンディをなくするようなシステムを作ることはもちろんですが、一人一人の消費者や企業に日本の森林問題の現状と国産の木材を建築資材として使うことの重要性を十分理解してもらい、国産材のファンになってもらわなければなりません。それには身近なところで国産材を使ってもらえるような取り組みを積極的に行ない、国民的な運動につなげてゆく必要があります。NPOが提唱した「日本の木で家を建てよう」という主旨の運動は、各地の木材業者や工務店のグループの中でも活発化してきました。また、これに関する著書や雑誌も店頭を飾るようになりました。日本木材学会も「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を開催して、提言書を公表し、全国的な運動を盛り上げようとしています。もちろん、林野庁でもこのような動きの中で、様々な施策に積極的に取り組んでいます。



スギを多用する板倉構法用壁の実大実験